

群 教 ゼ	G10 - 01
	平14.206集

自分の生活を支えてくれている人に 感謝する心情を育てる道徳指導の工夫

－ 総合的な学習「中央小米作り」活動と関連させて

特別研修員 小須田 美枝子

《 研究の概要 》

本研究は、道徳の時間と総合的な学習の時間とを関連させて、自分の生活を支えてくれている人に感謝する心情を育てる指導の工夫について、実践的に研究したものである。具体的には、道徳1の「よみがえった大地」、道徳2の「ぼく・私の向こうに」を基に、自分の日々の生活を支える多くの人の思いに気付き、どう応えていったらよいかについて考える学習と総合的な学習の時間における米作り体験の実践や追究活動とを関連させた。

【キーワード：道徳 小学校 感謝 総合的な学習の時間 米作り】

主題設定の理由

よい人間関係を築くには、互いに理解し、信頼し合うことが大切である。人々に支えられ助けられて自分が存在するという認識に立つとき、感謝の念が生まれる。それは生命尊重や人間尊重の精神の支えとなるものである。人間関係の希薄さから様々な問題や事件が引き起こされる現代社会においては、相手を尊重し合う心情を育てることの必要性を特に強く感じる。勤務校の教育目標「自ら学び 心豊かで たくましく ひびきあう児童の育成」の基本となる心情も、互いを尊重し合う心であり、その根幹は相手に対する尊敬と感謝の心である。

本学級（小学校5年 男子19名 女子12名 計31名）の児童は、全体的に素直で、清掃や係活動など真面目に一生懸命取り組める反面、誰かが困っていても気付かない、どうしたらいいかわからず教師の指示を待つといった主体性に欠ける面がみられる。また、友達との関わりの中で、何かしてもらった時は「ありがとう」と言いたいし、言ってもらうと嬉しいと思っ
てはいるが、実際に思いを伝えるとなると、仲のよい子同士の間だけに限られがちである。アンケートから見ると、ありがとうを伝えたい相手として児童が挙げたのは、家族や友達、教師であり、その他では、給食員さんの1名のみであった。身近な人に対して感謝の気持ちをもっている児童は多いが、その対象は「買ってもらった」「してもらった」という直接的な目に見えた行動についてであり、一つの出来事の裏にある人々の協力や苦労、日々の生活が多くの人に支えられて成り立っていることについての認識はほとんどない。これは転勤族や核家族が多く、地域での交流や多くの人との関わりが希薄になりがちなこと一因と考える。そのため、児童の交友範囲が限られ、積極的に人と関わり、相手を尊重し合う経験が少なく、目に見えない支えに対する意識や感謝の心情を醸成する素地が十分育っていないという実態がある。

そこで、人々と関わり、それぞれの人々の思いに触れる機会を多くもつために、道徳の時間と総合的な学習の時間の活動とを関連させ、自分を支えてくれている多くの人の存在に気付き、感謝する心情を高めたいと考えた。具体的には、先人の苦労や努力について考える道徳1、多くの人の支えに気付き、どう応えていったらよいか考える道徳2の学習と、地域ボランティアのお米名人の協力のもとに「中央小米作り」に取り組む活動とを関連させ、並行して進めることにより、児童の感謝する心情を育てることができると考え、本主題を設定した。

研究のねらい

道徳「多くの人々に支えられて」〈2 - (5)〉において、道徳1で、先人の思いや苦勞が現在につながっていることについて考える学習、地域ボランティア（お米名人）や保護者の方々の協力を得ながら進める「中央小米作り」の体験活動、道徳2で、日々の生活が多くの人の努力や苦勞に支えられていることを自覚し、どう応えていったらよいか考える学習を通して、自分の生活を支えてくれている人に感謝する心情を高められることを実践を通して明らかにする。

研究の見通し

- 1 道徳1【資料名「よみがえった大地」（自作資料）】において、田中正造に象徴される地域の多くの先人たちの「きれいな川と大地を取り戻したい」という強い願いに触れ、考えたことをまとめる。さらに、ゲストティーチャー（以下「GT」と記す）の話をうかがい、GTへのお礼の手紙を書くことにより、現在に連綿と受け継がれている先人の思いや努力に気付き、尊敬と感謝の念を抱くことができるであろう。
- 2 総合的な学習の時間「中央小米を作ろう」において、「土・水・人」をキーワードに米作りの作業や追究を進める中で、お米名人と交流する。その上で、これまでの活動のまとめとして「米・水・電気・人」をキーワードとして、「一個のおむすびができるまで」のイメージマップを作成することにより、人々の思いに触れ、収穫までの目に見えない陰の努力や苦勞、人々の協力に対して感謝の気持ちを高めることができるであろう。
- 3 道徳2「ぼく・私の向こうに」において、総合で作成したイメージマップを活用し、食糧危機に瀕している外国の子供たちの実態と自分自身の生活とを比較して、「彼らに必要なもの」という視点で見直すことにより、日々の生活がかけがえのない幸せであることに気付き、自分を支えてくれている多くの存在に感謝できるであろう。さらに、自分にできることを考えることで、多くの支えに応えていこうとする心情を高めることができるであろう。

研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 目指す児童像について

「自分の生活を支えてくれている人に感謝する心情が高まった子」とは次の～を指す。

先人の努力や苦勞に対して、尊敬し、感謝の念をもっている子

先人の努力や思いが現在の自分たちの生活につながっていることに気付き、努力や苦勞を重ねた先人を尊敬し、感謝の念をもつことができる。

一つの行為の裏にある努力や協力を気付き、感謝の気持ちをもっている子

米を収穫するためには、いろいろな人の苦勞や協力があることに気付き、お世話になった人に感謝しながら、米作りに率先して取り組むことができる。

人々の支えに感謝し、それに応えようとする心情をもっている子

日々の生活が世の中の多くの人の努力や苦勞のおかげで成り立っていることに気付き、自分を支えてくれている多くの人に感謝の気持ちをもち、それに対してどう応えていったらよいか、進んで考えることができる。

(2) 総合的な学習の時間「中央小米を作ろう」について

5年生全員で中庭に穴を掘り、田んぼを作り、稲を育てている。実践に当たっては、地域ボランティアの方が「お米名人」として、田植えや水の管理、稲刈りの指導など、全面的に協力してくださり、田んぼ作りには保護者にもボランティアで協力していただいた。米について個々の児童がテーマを決め、追究する中で、お米名人に質問して、米作りに関する工夫や苦労を知ったり、多くの人にお世話になりながら収穫まで世話したりする体験により、感謝の心情を育てることができると思う。

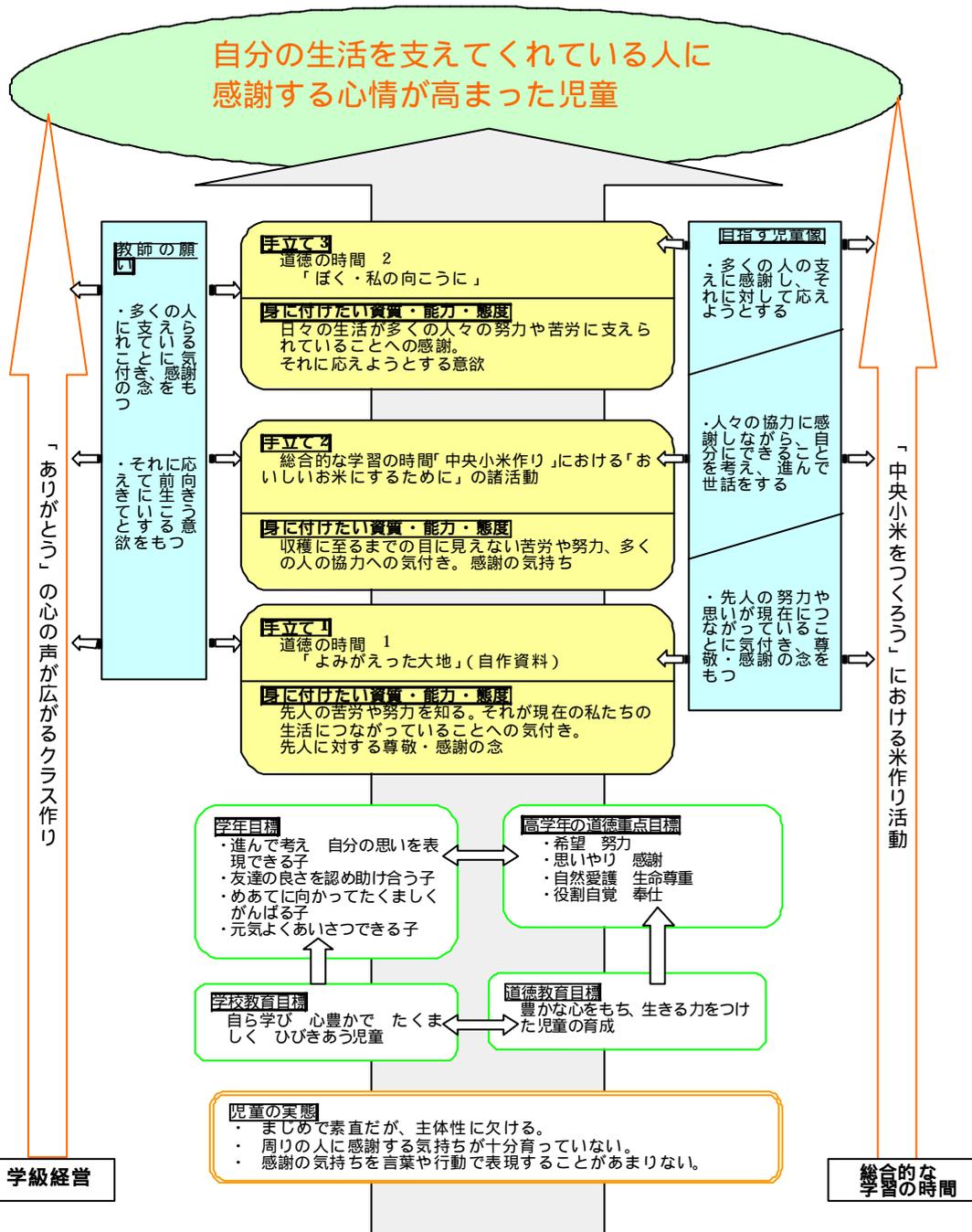


図1 全体構想図

2 実践の概要及び結果と考察

(1) 抽出児の説明

【A子】 事前調査で、「感謝とは、困っているときに助けてもらったときの気持ち」と答えており、感謝の気持ちを伝えたい対象としてあげたのが友達のみであった。より様々な人に対する感謝の気持ちを育てていきたい。

(2) 先人の行いを尊敬し、感謝の念をもてたか

ア 実践の概要

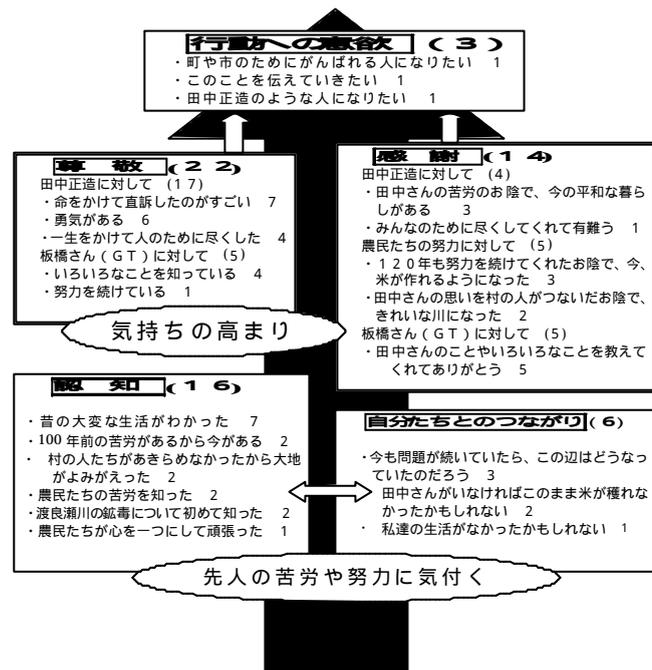
道徳1として、先人の苦労や努力について考えるために、一生をかけて足尾銅山の鉱毒問題に取り組んだ地域の先人「田中正造」を取り上げた自作資料「よみがえった大地」を活用した。渡良瀬川は太田市を流れており、この辺りも少なからず鉱毒の影響を受けたという背景があり、生活に直結した問題として、児童が自分たちとのつながりを実感しやすいと考えたためである。まず、鉱毒の被害を受けた田んぼの写真を提示した後、資料を読み鉱毒問題について知り、「正造はどんな思いで一生をかけて鉱毒問題に取り組んだのか。」という発問から、田中正造に象徴される当時の人々の強い願いについて考えた。さらに、現在もこの問題解決のため努力なされている板橋さん（以下G Tと記す）をお迎えしてお話を伺い、120年後の現在までその努力と思いがしっかり受け継がれていることを知り、お礼の手紙を書くという授業を展開した。

イ 結果と考察

資料1は、授業後の児童の感想を構造化したものである。身近な渡良瀬川にこのような悲惨な事件があった事実を知り、初めは「ひどい・かわいそう」といった感想が多かった。しかし、鉱毒の被害状況を押さえながら、正造がどんな思いで問題に取り組んだかに焦点を当てて、ワークシートに書かせたところ、「これ以上、被害が広がったら大変だ。命をかけてでも渡良瀬川の水を清くするためにつくそう。」「死んでいく人を苦しくて見てられない。何とか問題を解決して平和な暮らしを取り戻したい。」など、正造の強い思いに気付く発表があった。さらに「農作物をたくさん作り、楽しく暮らせる土地をもう一度取り戻したい。」等、農民たちの立場に立って考え、土と

水が人々にとっていかに大事なものであるかということにも目が向けられた。その上で、G Tの体験談を聞くことで、先人の努力がより強烈な印象として児童の心に響き、正造や農民への尊敬、感謝の気持ちにつながったと考える。また、G Tの話は、先人の思いが連綿と受け継がれ、100年前の事実と現在の自分たちが、その間にいる多くの農民たちの努力によって確かにつながっていることを児童が認識するきっかけとなった。「村の人があきらめないで、120年も努力を続けてくれたおかげで今、米が作れるようになった」といった農民の努力に対する言葉に児童の感謝の念が表れている。さらに「町や市のためにがんばれる人になりたい」「このことを伝えていきたい」など、今後の行動への意欲の高まりを示す記述も見られた。

資料1 児童の感想の構造化



資料2は、GTへ宛てたA子のお礼の手紙である。A子は家に帰って授業のことを早速家族に話し、親戚も被害にあったことを両親から聞いたと語った。A子が鉱毒の事実を深く受け止め、自分と結び付けて考えていることが分かる。また、児童のお礼の手紙には「おかげで」という言葉が数多く見られ、直接「感謝」という言葉を用いた記述も4つあった。

これらのことから、資料を通しての先人の苦労や努力についての気付きが、GTの話により、たくさんの人の思いが現在の自分につながっているという意識に広がり、先人への尊敬と感謝の念を抱くことができたといえる。

(3) 一つの行為の裏にある努力や協力を気付き、感謝の気持ちをもてたか

ア 実践の概要

総合的な学習の時間「中央小米作り」の一連の流れの中に、「おいしいお米にするために」という活動を設定した。(資料3)道徳1の学習で生じた「なぜ大地がよみがえったのだろう」という疑問から、3つのキーワード「土・水・人」を導き、「米作りに必要なもの」について考え、お米名人にGTとして授業の中で答えていただいた。その上で稲刈り・稲干しでの体験を各自の米作り体験記録「一粒の旅」に記し、その後のおにぎりを作る活動までに必要なものをクラス全体で話し合い、イメージマップを作成した。

イ 結果と考察

資料4は、お米名人にGTとして質問に答えていただいた授業後の児童の感想である。事前に質問をまとめて送ったところ、7ページにわたる細かい資料を用意してくださり、当日も米作りに関する様々な苦労や工夫や思いについて、お話してくださった。その中で「お米は、作る人によって味が違うか」という児童の問いかけから「違うよ。愛情をかければかけるほどおいしくなるよ。」「そうか。だから、毎日見に行くのか。」などのやり取りがあり、児童が作り手の思いに気付くよいきっかけになった。資料から、児童たちが、自分たちがまだ気付かなかった苦労がたくさんあることを知ったり、名人の博識ぶり(米作りの知恵)に触れたりして、米作りの思いをより強くしていることが分かる。

資料5は、A子が書いた米作り体験記録のまとめである。これまでの活動を振り返り、一つ一つの作業に多くの協力があったことに気付き、感謝の気持ちをもっていることが分かる。また、1学期の活動後のまとめには「楽しかった」という記述が多かったが、今回はお米名人への感謝が7つ、家族・先生への感謝の記述が6つ見られ、稲刈りの大変さや人々の協力を触れた記述が増えた。

これらのことから、お米名人への質問や対話を通して、児童は米作りの大変さや作り手の思

資料2 A子のお礼の手紙

板橋さんのおかげで、渡良瀬川の過去についてよく分かりました。今はこんなにきれいなのにどうしてかと気になりました。正造さんが命をかけて訴えたのに、お亡くなりになってしまって悲しいです。でも、今はそのおかげで生きているので、正造さんにも村の人にも感謝しています。

資料3 中央小米作り活動内容

中央小米を作るぞ (23時間)
お米博士になるぞ (15時間)

おいしいお米にするために (7時間)

- ・大地がよみがえったわけ(1)
- ・お米名人へQ & Aの授業(2)
- ・稲刈り・稲干しの体験(2)
- ・「一粒の旅」第1部のまとめ(1)
- ・一個のおにぎりの向こうに(1)

味わおう・作ろう (12時間)

資料4 児童の感想

- ・前に田んぼ作りをやったとき、名人の苦労が分かったような気がした。でも名人が観察など八十八くらいの手間をしていると聞いてくらくらしてきた。
- ・ぼくたちの知らないことをいろいろ知っているお米名人。さすがすごい。
- ・名人からこれからやることを聞いて、ぼくはウズウズしてきた。最後の仕事もがんばろうと思う。

資料5 A子の米作り体験のまとめ

お父さんたちの協力で田んぼができました。土入れは、みんなのパケツリレーの努力です。足ぶみは、転びそうになって大変でした。もちろん名人や先生がいなきゃ、始まりませんでした。みんな協力してできたことだと私は思います。

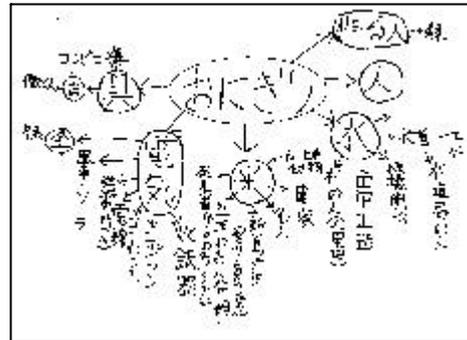
いに触れ、その上で稲刈りを体験したことにより、米作りに対する思いが広がり、人々の協力に対する感謝の気持ちが高まったといえる。

(4) 人々の支えに感謝し、それに応えようとする意欲をもてたか

ア 実践の概要

道徳2として、総合「おいしいお米にするために」の最後に作成した「おにぎり作りに必要なもの」のイメージマップ(資料6)を活用し、児童から出されたキーワード「米・水・電気・人」を基に、図のつながりに着目して考えた。その際、食糧危機に瀕している外国の実態を数字と写真で提示し、それらの国の子どもたちに必要なものは何かという視点で図を見直すことにより、当たり前とされている日々の生活が、実はかけがえのない幸せであることに気付き、それを支えてくれている多くの人の存在に目を向け、自分にできることを考えた。

資料6 「おにぎりに必要なもの」のイメージマップ



イ 結果と考察

導入として「1分間に28人」「日本人1人1日159g」という数字を提示し、この数字は何か自由に発想した後で、28人は飢えによる死者数、159gは残飯の量であることを説明し、食糧難の国の子どもたちの写真を見せた。そして資料6の図の中心を「ぼく・私」に置き換え、自分たちと写真の子供たちとを比較して、子供たちに必要なものは何か尋ねたところ、「外国の子供たちに必要なものは、みんな人間の生活になければならないものや人だと思った」「当たり前とされていることが、すごくかけがえのないものだ」と気付いた」といった発言があり、今の自分の安定した生活が多くの人々の支えによって成り立っていることに目が向けられた。さらに、「米や水の向こうにもいろいろなものや人がつながっている。僕たちはいろいろな人々の努力に支えられているんだ」と、つながりに気付いた発言もあり、価値への高まりが見られた。

その後、「いただきます」という言葉のもつ意味を考え、「これからいただきますにどんな気持ちを込めていきたいか」発表させた。(資料7) その中で、道徳1の授業前のアンケートで「感謝したい対象はない」と答えた、日頃発表に消極的なB男が「今までは、ただ何となく言っていたけれど、これからはありがとうという気持ちを込めて言いたい。」と自分の思いを述べた。

資料7 「いただきます」に込めたい気持ち

延べ人数(人)

いろいろな人に感謝	17
なるべく残さず食べよう	13
犠牲になった動物に感謝	10
米や食物を作ってくれた人に感謝	8
人々の思いを考えて	5
自分たちは幸せと言うことを意識して	3

さらに「自分にもできることを努力していきたい。」という、より前向きな2名の発言があったので、「自分はどんな努力ができるか、これからどうしていきたいか」と発問した。その答えをまとめたものが資料8である。「作った人の気持ちを考える」と人々の気持ちに視点を当てた回答が最も多かったのは、自分と人やものを結ぶ図中のつながりが人々の心であることに気付いた児童の心情の高まりの表れであると考えられる。また、「どれも生きていくために必要」という気付きから、実践意欲が生活全体へ広がっている。「手伝い」や「心を込めて挨拶」など、

資料8 自分が努力していきたいこと

延べ人数(人)

作った人の気持ちを考える	14
ごはんを残さない	12
手伝いをする	7
無駄遣いをしない	6
自分のことは自分でする	5
ごみを拾う・捨てない	5
ものを大切に使う	4
心を込めて挨拶する	3
人の役に立つ	2

自分を支えてくれている様々な人に対して、進んで関わっていこうとする意欲や、「ごみを捨てる」「人の役に立つ」など、感謝の心に裏打ちされ、自分も社会の一員として支えになりたいという意欲が芽生えていることが分かる。

資料9は、A子のワークシートの一部である。A子は、この時間活発に挙手し、図から気付いたこととして、「私たちは、いろいろな人々の努力によって生きていることに気付いた。」と発言した。発言やワークシートから、今の自分の生活の豊かさを真剣に受け止め、人々の支えに気付き、それに対して感謝の気持ちをもち、できることを進んで実践していこうというA子の意欲が感じられる。さらにA子は、授業後の感謝についてのアンケートに「感謝の気持ちを表すのはありがたいという言葉だけじゃない。

資料9 A子のワークシート

1つのものの向こうには、いろんな広がりがあり、努力や思いがたくさんつながっている。水や米など、全部人々の努力でできているのだから、作っている人々の食べてほしいという気持ちを忘れないで大切にしようと思う。
私たちにできることは、むだづかいをしないでお金を大切に使うこと、家の人たちを手伝うこと、自然を守るためにごみひろいすることなどたくさんある。

行動でも表せる。この大切な命で毎日楽しく過ごすこともその一つだと思う」と書いた。

また、これから努力したいこととして「人の役に立ちたい」と書いた男子が、この後、給食が残っているとみんなに声を掛けたり、配ったりする役を買って出たことがきっかけとなり、「給食ボランティア」が誕生した。現在、昼食時には「まだあるよ」「ありがとう」などの声が教室に行き交っている。

これらのことから、道徳2で、イメージマップを活用し、つながりを視覚に訴え、それに対してどう応えていきたいか一人一人にじっくり考えさせたことにより、他者の自分に対する有益な行為に対してだけでなく、日々の生活の支えに対して感謝する気持ちが高まり、それに応えようとする心情が育ってきているといえる。

研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

道徳1での地域の先人を扱った資料やGTの話、総合におけるお米名人との触れ合いなど、人と関わる場面を積極的に取り入れ、児童が人々の思いに触れ、先人や周りの人の願いに気付いたことから、相手への尊敬が生まれ感謝の気持ちが育まれた。その上で、道徳2の学習を通して相手を思いやる気持ちに支えられて自分が生きているという意識が高まり、児童の感謝する心情を深めることにつながった。

児童から出されたキーワード（「土・水・人」「米・水・電気・人」）を媒体として、それらをつなぐ人の思いに着目して考えさせたことで、今まで意識されなかった感謝の心情を自分自身のこととして感じ取ることができた。

「米」を柱にし、道徳1から生じた疑問を基に総合の授業を組み立て、体験活動と追究活動の中で作成した資料を道徳2で活用したことで、児童は価値に対する思いを途切らせることなく、考えたり活動したりして、感謝する気持ちや対象を広げていくことができた。

2 今後の課題

感謝とは、児童の日常生活の中ではなかなか認識しにくい感情である。それだけに、道徳の授業で育まれてきた感謝の気持ちを、毎日の生活の中で自然に発揮していけるような実践力につなげていくことが必要である。そのために、児童の日常生活の様々な機会をとらえて言葉掛けしたり、自分自身を見直す場面を工夫したりするなどして、道徳の時間から道徳教育全体へ視点を広げ、より素直に感謝の心情を表現できる児童の育成に努めていきたい。